

長須阿弥陀寺 悪龍濟度

(茨城県坂東市長須 阿弥陀寺所蔵)

(1)「龍のひげ」

(「寿大学生がしらべた いわい市伝えばなし」岩井市教育委員会発行)より

長須の阿弥陀寺は、山号を「屈旋龍山」という。今からおおよそ七百九十年ほど昔、貞応2年(1223)8月26日のこと、親鸞聖人が、みむらの妙安寺から長洲(当時の長洲寺)へまいらんとして、鶴戸沼のほとりに立たれました。

夏の陽が水に反射してまぶしい、風のない暑い日のことでした。

当時の鶴戸沼は、満々とした水が上出島から伏木あたりまでつづき、長洲へ行くには舟で渡るしかなかったのです。

「暑いところ、たいぎですね」

と、親鸞聖人はねぎらいのことばを船頭に向け、用意された小舟に乗りました。

同行のお弟子さんたちも、ていねいなお礼のことばをかけ、きちんと正座して乗りました。

船頭は、お寺からえらいお坊さんたちだとは聞いていましたが、質素な身なりながら、あまりの高貴さにびっくりして、ひれふさんばかりに土下座してしまいました。

「もったいないことばをいただき、ありがとうございます。今日は、沼も静かですのでどうぞご安心く



長須阿弥陀寺 (悪龍濟度の掛け軸全体)

ださい。」と、船頭はカブよく竿をさしました。

水は鏡のようにすみ、藻がゆらいているのが見えています。舟は滑るように走りました。

しばらく行くと、船頭は熱くてたまらなくなりました。緊張のあまり異様な汗が流れるのかと思いましたが、確かにふだんとちがう熱風が吹き寄せていました。

沼の中ほどの最も深いあたりが、わずかにうねり、波が騒いでいるのです。



長須阿弥陀寺（龍の場面）

「わたしは、この沼に住む龍でございます。あなたがたの行くてをさまたげるつもりはございません。ただ……ご慈悲をいただきたくまいったものでございます。」と、聞こえました。

「その龍が、なんの慈悲を—。」聖人は、静かにおごそかに言いました

「わたしは、過去

船頭は、不安になって聖人を伺いました。聖人は、平然と前方の一点を見たまま座しておられました。

しかし、異変はすぐ起こりました。

空にはわかにかき曇り、あたりは暗くなり、風さえ立ちはじめ、荒波が船べりをはげしく叩くようになりました。

舟は漕げども進まず、ただ廻されるばかりで、立っていることさえできないほど、大きく揺られたのです。

この沼を毎日往復しているさすがの船頭もおそろしくなり、竿を投げ出し、ふるえるばかりでした。

やがて、三丈ぐらいの波が立ち、その一瞬、金色の鱗が光り、龍がうねって見えました。

船頭は、とたんに腰の力が抜け、ただ口の中で、「なんまんだ なんまんだ」と唱えながら、気を失ってしまいました。

それは、恐ろしく大きい鶴戸沼の龍だったのです。

龍は、舟のまわりを屈旋し、次第にはげしくなり、舟は木の葉のようにもまれ、今にも転覆しそうになりました。

聖人は静かに立ち上がり、両手を挙げ、龍を鎮めるように、お経を唱えはじめました。それは地鳴りのようにあたりに響きました。

「何ゆえに、われら一行のゆくてをさまたげるのか!」と問いただきました。

すると地とも天ともつかぬところから、

のむくいによって三熱の苦しみを受けているものです。この苦しみから、何とか逃れたいと思い、お願いにまいったものでございます。」と、語りはじめた龍は、大きくからだをうねらせました。

「わたしは、この近在の貧しい百姓の娘として生まれました。家族も多く、働いても働いても、貧しさは増すばかりでございました。姉妹は、年もゆかぬうちに売られ、とうとう年老いた両親と自分一人になってしまいました。

その年は、たび重なる戦とひどい凶作で食べるものも、着るものもなく、その上家は焼きはられて、逃げまどうばかりの明け暮れでございました。それでも、年貢のとりたては厳しく、病で伏せている老父のふとんまで奪われるしまつで、どんなに親孝行娘と近所の評判をうけても、どうすることも出来ず、野稗の雑水で飢えをしのいでおりました。老父の死後、老母も後を追うように病にかかり、飢えと熱に苦しみ、そのさまは目をおおうばかりでございました。ある夜、老母の苦しみはいっそうひどくなり、ひと思いに殺してくれと泣いてたのむので、自分も死ぬつもりで老母を両手で……。」ここまで話して、さすがの龍も声をつまらせず泣くばかりでした。

龍の涙は、しのつく雨となり水面を強く打ちました。濡れるままの一行は、声をそろえてお経を続けておりました。



長須阿弥陀寺 (龍の髻)



長須阿弥陀寺 名号を刻んだ石斧3本

「その業報があったというのですね。慈悲とは、そんなものなのでしょう。その愛が強ければ、苦しみもまた大きいものです。母の苦しみを見かねて、命がけで手をかけた…。それから先は一。」聖人の問いかけに、龍は話しつづけました。

「一気がついてみると、両の手の甲に鱗が生えはじめました。恐ろしくなって腕をみるとみるみる鱗ができてきました。とうとう、わたしは蛇になってしまったのです。わたしは悲しみのあまり狂ったように身もだえてふり返ると、そこには老いた母と自分のむくろが、青白い月の光を受けて、冷たく横たわっておりまして。あゝ、これで生きる苦しみはなくなると、思ったのですが、蛇には三熱の苦しみがあったのです。その一つは、いつも体中に熱風が吹き、肉や皮ふが焼かれる苦しみです。それで、この沼に入りましたが、いつの間にか大きくなって、龍となりました。二つめは、どんなに詫びて努力しても許してもらえない苦しみです。三つめは、迦桜羅という、黄金の翼を広げると三百里もある鳥におどかさされる苦しみもあります。頭に如意珠があり、鋭い口ばしから火焰を吐き、龍や蛇をいたぶる支配者です。わたしは、ただ、静かにみ仏のもとに行きたかっただけなのに一。」龍は、すべてを語り終えると、聖人の前から姿を消してゆきました。沼は熱湯のようにあれたぎっておりましたが、しだいにおさまり、水面は小さな波だけが残っていました。

「今日は、幸いらい方がこの沼をお渡りになると聞き、救いの道を説いていただきたく、醜い姿で現れたのでございます。」と龍は水底深く沈んで、身

を隠すようにして哀願しました。

「聞けばお気の毒な話です。み仏の前には、善も悪も区別はありません。むしろ、罪深ければ深いほど、み仏は大慈大悲をくださるものです。あなたの代わりに、わたしがお願いしてあげましょう。」

聖人は、かたわらの石斧に名と号を刻んで龍に投げ渡し、天を仰いでお経を唱えはじめました。

するとどうでしょう。暗黒の雲は、しだいに明るくなり、五色の雲に変わり、微妙な音楽が聞こえるようになり、香わしいかおりが漂いました。

龍は、醜い死がいを残し、美しい婦人の姿となり、天に昇って行ったのです。

親鸞聖人を礼拝し、また、同行の一行を拝む姿は、天女のような様子でした。

沼は、もとの静けさに戻り、何事もなかったかのように、夏の日があるばかりでした。

聖人は、長洲寺につくと、村の人々を集め、”八龍神“として、龍の死がいを埋め、手あつく祭りしました。

「このことを、後世の人びとに伝えよう」と、聖人は、龍の髻を残し、寺の宝として納められました。

この髻は、今も寺に保存されています。また、寺の敷地もせまかったので、杖で印をつけ、七本の榎を植えて、寺領を広げました。その一本が現在も残っています。

聖人は、三熱の苦しみから救われた龍が水面から出たり入ったりして喜んだ姿から、「屈旋山阿弥陀寺」と名をつけたといわれています。